【土木計画学研究・講演集　No.23(2)　2000年11月】

近代における琵琶湖疏水を基盤とした水辺のアメニティ形成に関する研究

Water-front design based on the Lake Biwa Canal under modernization

田中尚人[※1]・川崎雅史[※2]・出村嘉史[※3]・守津真麻[※3]
by Naoto TANAKA, Masashi KAWASAKI, Yoshifumi DEMURA and Masa MORITSU

1．はじめに

(1) 研究の手法と目的

都市内の水辺は、様々なアメニティを提供する空間として古来より機能してきた。本研究では、歴史的な文献・資料[1) 2) 3) 4) 5) 6) 7)]等を用い、近代化という価値観の変革期に琵琶湖疏水を基盤として成立したアメニティ空間の代表的事例として京都東山の岡崎地区、岡崎公園の水辺を取り上げた（図-1、表-1参照）。本研究の目的は、琵琶湖疏水がインフラストラクチャーとしての本来的な機能として水辺のアメニティを形成してきたことを実証し、その仕組みと歴史的経緯を明らかにすることである。当時の人々が公園や水辺に対して抱いていたイメージ、またそれを具現化するための施設や装置の設計思想を明らかにすることは、今後のインフラストラクチャー・デザインや都市設計に大いに役立つ。

(2) 既往研究と本研究の位置づけ

琵琶湖疏水が都市に与えたインパクトに着目した研究としては、舟運による空間骨格形成に着目した筆者の研究[8)]がある。近代における京都の都市計画や公園に関する研究には、丸山の円山公園に関する一連の研究[9)]、公園と都市のイメージについて言及した土井の研究[10)]、同じく風致・景観施策を含めた公園行政までも扱った苅谷の研究[11)]等がある。

本研究では、琵琶湖疏水等のインフラストラクチャーと水辺のアメニティ形成に焦点を当て、インフラストラクチャーの効用を景観的に捉えていること、人々の水辺に関する関心を扱っていること、等が特徴と言える。

Key Words：景観、空間整備・設計、琵琶湖疏水
※1　正会員　修士（工）京都大学大学院工学研究科　助手
※2　正会員　博士（工）京都大学大学院工学研究科　助教授
※3　学生員　学士（工）京都大学大学院工学研究科　修士課程
〒606-8501　京都市左京区吉田本町　Tel&Fax 075-753-5123

2．岡崎地区と琵琶湖疏水

(1) 近代京都における「公園」モデルの受容

明治6（1873）年1月15日、太政官布告第16号「社寺其他ノ名区勝跡ヲ公園ト定ムルノ件」[12)]にて公園の概念が日本に知らしめられた。しかし近世日本では「公園」に相当する概念、場として既に「名所」[13)]が存在しており、近代化の時期に「公園」というモデルの受容過程で様々な空間が創出された。京都では、当初京都博覧会の会場であった御所を公園とするなどの対応を行った。初めての正式な公園の誕生は、明治19（1886）年12月25日の府告示により、事前に定められていた名所地と、安養寺、弁天堂、長楽寺、双林寺の各境内と道路敷が合計された地に設定された円山公園であった。

(2) 鴨東開発

東海道の日ノ岡峠を越え京都盆地に降りると広がる岡崎地区は、その昔京白河と言われ、平安期以降院政の中心として繁栄していたが応仁の乱により衰退し、その後は白川の水を灌漑用水とした田畑地帯となり市郊外の代表的農耕地帯であった（図-2）。

この地区は鴨川を隔ててはいるものの京都の中心から比較的近く、白川扇状地という平坦で広大な土地を有したことから都市開発の要求が当時から相当高かったことが推察される。

(a) 白川の治水

岡崎地区の都市的な開発には、常に白川の治水という課題があったが明治20年（1887）の計画変更に伴い南禅寺・夷川舟溜を両端とする鴨東運河を岡崎地区に開削されることになり、白川と接続された。水力発電の用を済ませた岡崎地区での琵琶湖疏水に白川からの取水の意義は見出せない故、琵琶湖疏水と白川の接続には、南禅寺舟溜の沈砂効果、白川下流域の治水、の意義が存在したと言える。

天保２年（1831）頃（改正京町絵図細見大成）

表-1　岡崎地区年表

西暦（和年号）	京都	岡崎地区
明治６年（1873）	1.15 太政官布告第16号	
明治18年（1885）	6.2 琵琶湖疏水起工式（於：藤尾村）	
明治19年（1886）	12.25 府、円山公園開設	
明治20年（1887）	琵琶湖疏水計画大幅修正	ｲﾝｸﾗｲﾝ建設、鴨東運河開削
明治22年（1889）	8.- 市参事会、水力電気事業決定	
明治23年（1890）	4.9 琵琶湖疏水竣工式（於：夷川舟溜）	
明治25年（1892）	4.1 円山公園などにアーク灯設置	
明治28年（1895）	4.1 第四回内国勧業博覧会（-7.31） 円山公園に疏水からの噴水計画 10.22 平安遷都千百年紀年祭	2.25 平安神宮社殿・神苑等竣工 4.1 京電鴨東線（京都駅～岡崎博覧会場）営業開始
明治36年（1903）		4.1 京都市紀年動物園開園
明治37年（1904）	日露戦争	7.8 市、岡崎公園開設
明治41年（1908）	10.- 市、三大事業起工式挙行	
明治42年（1909）		4.1 京都府立図書館開館
大正２年（1913）	4.- 円山公園、植治による改修工事着手	
大正４年（1915）	10.1 大典記念京都博覧会（-12.19）	大典記念博覧会会場となる
昭和３年（1928）	9.20 大礼記念京都博覧会（-12.25）	10.12 平安神宮大鳥居完成
昭和５年（1930）	2.1 風致地区指定公告（日本初）	

大正４年（1915）頃（京都近傍図）

図-1　岡崎地区の今昔
（『慶長昭和京都地図集成』より）

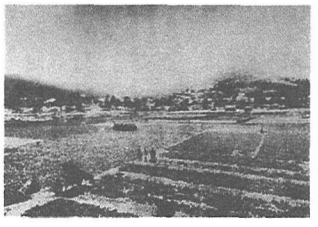

図-2　明治26年（1893）頃の岡崎地区
（『写真集成京都百年パノラマ館』より）

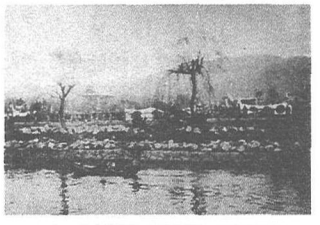

図-3　明治37年（1904）の鴨東運河
（『写真集京都幕情』より）

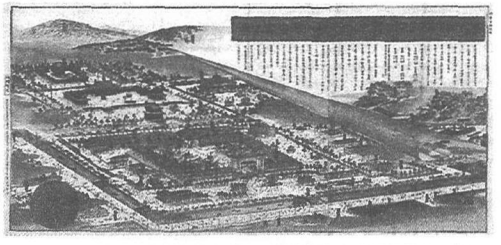

図-4　第四回内国勧業博覧会の様子（『京都の歴史と文化』より）

(b) 鴨東運河と街区形成

明治20年（1887）琵琶湖疏水着工の段階では鴨東運河のルート選定に関して、インクライン下からまっすぐ西進し鴨川に出るルートが考えられた。しかしこのルートは急勾配のため２つの閘門が必要となるので、現在の様に２ヶ所で直角に曲がり、幅員10間（約18m）の流路で西北の夷川から鴨川に導くように計画し直された。この計画に対し、疏水事務所の坂本則美理事は翌1888年（明治21）２月27日に北垣知事に対し直角線は遠回りになるので、最短の斜行線を建議したが、北垣知事は「岡崎地区は将来、都市計画によって整備する計画があるので、水路を斜線に通すのは好ましくない」[14] として退けた。

このように明治中期には「鴨東開発論」[15] 等を土台に、田畑の広がる岡崎地区を舟運を基軸として都市開発していく構想があり、鴨東運河は岡崎地区の街区形成に大きな影響を及ぼした。

3．岡崎公園における水辺の活用とアメニティ形成

鴨東開発の流れの中で、東山の麓に水辺により整然と区画された岡崎地区（図-3）では、明治28年（1895）に第四回内国勧業博覧会（図-4）、平安遷都千百年紀念祭が開かれ、明治37年（1904）京都市により岡崎公園が指定された。

(1) 遊船事業

明治23年（1890）４月末遊船業が許可され、同年５月、南禅寺舟溜・夷川舟溜間にも多くの遊船が浮かんだ。夏期の納涼客を見越して、琵琶湖疏水沿岸には茶店や飲食店が軒を連ね、東山山麓の新名所として脚光を浴びることとなった。

明治24年（1891）５月21日「京都市有疏水運河条

例」の公布により遊船業の取り決めが行われ、開通４年目の明治27年（1894）には年間通船数14,522隻、乗客数12万9881人と開業当初の70倍近くを示し、琵琶湖疏水は絶大な人気を得るに至った（図-5）。

また遊船業に次いで、明治24年（1891）７月には大津の業者が、大津・蹴上間下り４銭、上り５銭、１日３往復の渡航業を開業するや、たちまち競争が始まり、疏水下り、貸し切り遊船、ボート遊び等、疏水の人気は年々高まりを見せた。

明治28年（1895）の内国勧業博覧会や平安遷都千百年紀念祭は疏水ブームに拍車をかけ、定員25人の渡航船60隻はフル回転で１日にほぼ1300人余りの乗客をこなしたと推計される[16]。この年は約30万人の人々が琵琶湖疏水の舟遊びを楽しみ、明治30年代まで安定した乗客数を得ていた。

(2) インフラストラクチャー整備と集客

岡崎地区開発初期のイベント、博覧会（会期中の入場者は113万人[17]）や紀年祭には多くの人々が押し寄せた。遊船やイベントの魅力もあったのであろうが、都市内の交通インフラストラクチャーが未成熟なこの時代に、これだけの集客を可能にしたのは、七条ステンショ（当時の京都駅）から博覧会会場までを繋いだ日本初の市街地路面電車、京都電気鉄道の存在が重要であると言える。この路面電車敷設も琵琶湖疏水による水力発電の重要な目的であった。都市的な集客にインフラストラクチャーの整備が計画されるのは洋の東西、時代を問わないが、空間の骨格から、交通・運輸の面まで関わりを持つ、岡崎公園と琵琶湖疏水の関係はウェル・プランニングと言える。

(3) 岡崎公園の水辺と琵琶湖疏水

水位調節された静かな水面であった鴨東運河における遊船事業は、東山・岡崎地区の観光的利用の可能性を示すと共に同公園の集客能力の高さを示し、明治30年代には動物園、40年代に府立図書館・市勧業館、大正期に市公会堂、昭和期には市立美術館・国立美術館・京都会館と[18]、現代へと続く欧風文化を多く取り入れた文化施設集積地区としての都市開発の基礎をつくった。

また平安神宮の神苑をはじめ、これら岡崎公園内の施設には琵琶湖疏水から引水した噴水池が多くつくられた。同様に琵琶湖疏水から引水していた南禅寺界隈の庭園群では小川治兵衛の手により遣水の手法が適用されたが、岡崎公園内では当時の人々にもてはやされた欧風の噴水（図-6）が設置された。この選択にも、岡崎公園を近代化の象徴として欧風の装置を選んだことが指摘できる。

岡崎公園では、琵琶湖疏水のインフラストラクチャーとしての能力が最大限に発揮され都市的な集客が行われ、「ヴエニスを思はせる」[19]と形容された（図-7参照）「近代」的な欧風公園づくりが行われた。街路や水路を用いて整然と区画された空間構造は現在も変わらず、岡崎公園は文化施設集積地区として今もなお賑わいを見せている。

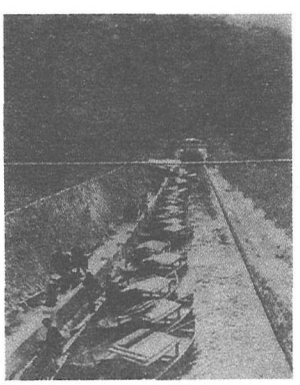

図-5　屋形船の様子
（『琵琶湖疏水誌』より）

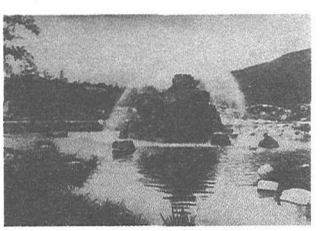

図-6　紀念動物園内の噴水池
（『平安神宮百年史』より）

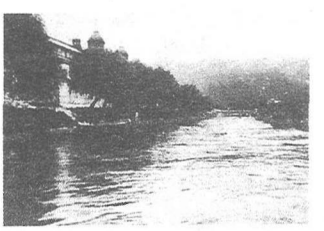

図-7　大正初期の鴨東運河
（『写真集成京都百年パノラマ館』より）

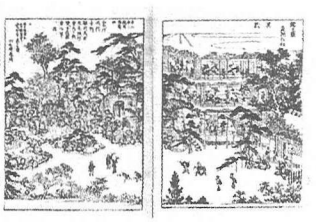

図-8　近世円山の林泉庭園
（『都林泉名勝図絵』より）

図-9　円山公園の噴水池
（『写真集成京都百年パノラマ館』より）

(4) 琵琶湖疏水と円山公園の水辺

近世の円山界隈では、図-8の絵図に描かれたように、各庭において東山から湧き出る水を利用した遣水が施されていた。山辺の地形を利用し、緑を背景とした滝と小さな流れの演出は身近な自然を感じさせる一種の装置と言える。

明治26年（1803）には、円山公園内に噴水池計画（図-9参照）が実施された。琵琶湖疏水の設計者である田辺朔朗を招いてのこの計画は、蹴上船溜から引水する総距離1.7km余りの工事であった[20]。

第二次公園地拡張後、京都市は円山公園改良計画案を京都市嘱託でもあった京都高等工芸学校（現：京都工芸繊維大学）教授の武田五一に依頼し、公園改良工事は大正２年（1922）４月に着工、翌年３月に完了した[21]。造園部分には、小川治兵衛（植治）を擁しほぼ現在に至る姿となった。

近代日本庭園の先覚者といわれた植治は当時、主に南禅寺の山麓を中心に活躍した回遊式庭園の作庭家であった。彼の作庭に共通する要素は、琵琶湖疏水によって得られるようになった豊富な水、東山という優れた自然景観等が挙げられ、日本庭園の因襲的な空間様式にとらわれず洋風庭園の概念等も取り入れて新鮮な庭づくりをしたと言われる[22]。植治の作庭には、日本固有の自然景観と西洋的な空間造形の融合が見られ、その造景要素として琵琶湖疏水の水が重要な位置を占めていることは興味深い。

円山公園における琵琶湖疏水の影響は、間接的な水の供給にとどまっている。しかし、植治の作庭にも現れているような近代的な公園空間に、近世の遣水のモデルが適用されていることは興味深い。

4．おわりに

潜在的に都市化のポテンシャルを有していた都市近郊農地であった岡崎地区は、京都の近代化を象徴するインフラストラクチャーである琵琶湖疏水が挿入されることで、都市的な空間となり得た。

明治期における近代化は、ある種「欧化」の思想に走り日本固有の文化が失われたとされる。しかし、日本伝統の遣水文化は琵琶湖疏水の水を利用して、南禅寺界隈や円山公園、岡崎公園内では平安神宮等において継承された。また、近代化を象徴的に示す場として設定された岡崎公園においては、琵琶湖疏水はインフラストラクチャーとしての本来的な機能、舟運や灌漑、発電のみならず、

1. 岡崎地区の街区形成（空間骨格の形成）
2. 遊船による水辺空間の活用
3. 路面電車による都市的な利便性の確保

などの影響を直接・間接に及ぼし、人々が都市的なアメニティを享受することを可能にした。

このような、アメニティ形成のディティールまでも視野に入れたインフラストラクチャー・デザインは、今後の公共空間デザインに有益な示唆を与えると筆者は考える。

【参考・引用文献】

1) 大塚隆編：慶長昭和京都地図集成、柏書房、1994.6
2) 吉田光邦監修・白幡洋三郎ほか編：写真集成京都百年パノラマ館、淡交社、1992.7
3) 田中泰彦編：写真集京都慕情、京を語る会、1974.8
4) 京都府京都文化博物館歴史展示案内：京都の歴史と文化、1988.10
5) 田邊朔郎：琵琶湖疏水誌、丸善、1920.10
6) 平安神宮百年史、平安神宮、1997.3
7) 都林泉名勝図絵、1799
8) 田中尚人・川崎雅史：琵琶湖疏水計画における舟運機能に関する研究、土木史研究第20号、pp.151-159、2000.5
9) 丸山宏：近代日本公園史の研究、思文閣出版、1994.12 他、造園学会に発表した円山公園に関する論文は多数
10) 土井勉：京都市の公園形成史 ― 第二次大戦前まで ―、土木史研究第11号、1991.6
11) 苅谷勇雄：明治期の京都の風致景観行政に関する歴史的研究、土木史研究第11号、1991.6
12) 白幡洋三郎：近代公園史の研究―欧化の系譜―、思文閣出版、pp.178-179、1995.3
13) 例えば、中村良夫：研ぎすませ風景感覚１名都の条件、pp.94-109、技報堂出版、1999.3
14) 京都市電気局：琵琶湖疏水及水力使用事業、pp.306-307、1940.3
15) 小林丈広：明治維新と京都、pp.170-173、臨川選書、1998.6
16) 京都市編：琵琶湖疏水の100年<叙述編>、京都市水道局、p.249、1990.4
17) 井ヶ田良治・原田久美子編：京都府の100年、年表、山川出版社、1993.7
18) 京都市：史料京都の歴史第８巻左京区、平凡社、p.100、1985.11
19) 岩井武俊：京ところどころ、金尾文淵堂、1928.11
20) 京都市編：琵琶湖疏水の100年<叙述編>、京都市水道局、pp.356-357、1990.4
21) 丸山宏：近代日本公園史の研究、思文閣出版、p.194、1994.12
22) 杉田博明著、京都新聞社編：近代京都を生きた人々 明治人物誌、京都書院、pp.５-21、1987.4